

坂野良吉著

『中国国民革命政治過程の研究』

校倉書房 2004年 428ページ

さき がわ ゆう じ
笹川裕史

I

本書は、四半世紀にも及んだ著者の中国国民革命史研究の集大成である。著者が本書につながる諸論文を発表しはじめたのは、1980年代前半であった。その前後の時期は、今日の学界状況とは異なって、1920年代中葉の国共合作下で展開した国民革命に関する研究が活況を呈していた。それは、戦後日本の中国近代史研究を長く呪縛してきた中国共産党の正統的革命史観から脱却して、中国革命史像の再構築を模索する有力な一潮流にほかならなかった。

それでは、そこにおける著者の個性はどのような点に求めることができるであろうか。評者の私見によれば、それは、国民革命の帰趨を決定する最も緊迫した局面を正面に据えて、多様な諸勢力・諸階層の利害や行動が織りなす、曲折と危うさに満ちた政治過程のダイナミズムを生々しく描き出したことにあると思われる。一般に、国民革命に関する従来の通説的歴史像には、国共両党やコミンテルンなど様々な党派の立場からの政治的総括がとりわけ大きな影響力を振るってきた。これに対して、著者の場合は、革命への共感を基調としつつも、革命の高揚は広範な諸階層の統一戦線の幅広さに支えられてこそ可能であったという当該時期の現実的制約を直視する立場にたっていた。そのような立場から、当該時期の困難を極めた現実を顧慮せずに労農運動や急進路線を一面的に過大評価する通説の硬直性を批判的に解きほぐしながら、著者の分析は進められてい

た。かかる著者の視点と方法は、同時期の研究水準を確実に示すものであったし、中国近代史研究を始めたばかりであった当時の評者にとっても、きわめて魅力的に映ったものであった。以上のような個性を持って1980年代前半の国民革命研究をリードした著者の諸論文は、本書においても基軸的な位置を占めており、なお精彩を放っている。

とはいえ、20年以上の歳月の間に、研究対象である中国も、中国をとりまく国際社会も、ともに劇的な変貌を遂げた。これに伴って、学界においては国民革命ばかりか中国革命史全般への関心も著しく低下し、研究は多彩な分野に拡散していった。そのような風潮に抗するかのように、著者はなお国民革命という1点にこだわり続け、その成果を本書に結実させた。しかし、そのような本書にも時代の変化とそれへの著者なりの応答を看取することができる。すなわち、本書を繙くと、過去の分析の深化や拡がり認められるとともに、問題設定それ自体において顕著な転換が示されていることがわかる。その意味で、本書には、著者の過去の研究を集積しただけにとどまらない、新たな価値が加味されている。この点について、まず最初に言及しておこう。それは、とりまなおさず本書全体の分析枠組みを紹介することにもなるからである。

まず第1点は、本書の課題を「国民を主体として国民革命史を構成し直す」ことにあるという著者の言葉に総括的に表現されている点である。すなわち、中国における「国民」の形成と一定の成熟、そしてそれを示す各種改革運動の諸動向をおさえたうえで、それとの関連において国共両党の革命戦略が改めて位置づけ直されている。第1次国共合作によって新たに策定された革命戦略が広く「国民」に受容され根を下ろしたのは、主として五四運動以降に活性化した「国民」各層による各種改革運動の転換に合致したことによっていた。これが、脇役に過ぎなかった革命政党（国共両党）を民国政治の主役へと押し上げたとされている。ただし、このようなとらえ方は、広範な諸階層の統一戦線を重視してきた著者の当初からの視点を想起すれば、なおその延長線上にあると位置づけることも可能であろう。

より明確な枠組みの転換は次の点にある。すなわち、第2点は、国民革命の帰結を、なによりも「革命党独裁の党治体制」の創出に求め、その創出過程に分析の焦点が置かれたことである。したがって、国民革命の民国史上における位置は、「約法（民国初年に制定され、その後有名無実化した中華民国の臨時憲法）に則る『法治』体制」から「革命党による国民主権の代行としての党治体制」への転換にあったととらえている。著者は、本書の「あとがき」で、長年にわたる国民革命研究がこのような見方に行き着いたことについて、「筆者にとってこれにまさる皮肉はない」、さらには「人民民主主義への思い込み」に長く囚われてきた世代の者には認識上の転倒に値した」と、率直な感慨を記している。著者自身の感慨はひとまず置くと、著者の論旨を繋ぎ合わせれば、次のようになろう。すなわち、国民革命を「国民」を主体として構成し直してみると、「国民」的課題解決へ向けた努力の過程において、その「国民」からも超越した独裁権力（党治体制）を産み落とした逆説的な事件として描かざるを得なかったということである。そして、その屈折した歴史の中に、著者は現代中国のルーツをも見ようとしている。

以上の2点が、本書において著者がたどり着いた国民革命史像の枠組みである。

II

さて、次に章別構成を提示したうえで、本書の論旨を簡潔に紹介していこう。

序 章 本書の課題と研究視角ならびに学説史

第1部 国民革命への過渡期

第1章 国民革命への過渡期についての覚書

第2章 第1次国共合作成立過程の再吟味

第2部 国民革命の諸様相

第3章 国民会議運動の展開と屈折

第4章 北伐第1段階における革命情勢

第5章 革命激化段階における政治過程の検証

I 上海3次暴動と中国共産党

II 湖南省における国民革命と農民運動

第3部 武漢国民政府の解体と国共分離

第6章 武漢国民政府論序説

第7章 国共党内合作の破綻についての一考察

終 章 国民革命史像の再構成ならびにその民国史上における位置

第1部は、国民革命へ到る「過渡期」を扱った2つの章によって構成されている。第1章では、国民革命の開始を1924年に求め、19年ないし20年から23年末までを、五四運動から国民革命開始に到る「過渡期」として設定している。著者は、この時期に展開された各種改革運動を扱った従来の研究を整理しながら、その特徴を、「約法」（前述）秩序のもとでの立憲国家創設の運動ととらえ、運動の担い手を、新興の都市部およびその近郊を基盤とした「紳商層」（清末新政以降の近代化や立憲改革を担ってきた社会的指導階層）に求めている。こうした運動が限界を露呈するのが1923年であり、国民党の改組と新たな戦略の策定は、かかる政局の転換を受けて行われた。

第2章では、第1次国共合作の成立過程が、国内政局やコミンテルン・ソ連の関与などを含めて総括的に再検討されている。ここでも、1923年に「孫呉合作」（孫文を理念的象徴として推戴し、それに直隸派実力者呉佩孚の武力を結合して軍閥政治の克服を目指す策略）という体制内改革の最後の試みが挫折し、その中で改組国民党に対する期待が高まっていく構図が提示されている。ただし、改組国民党を民国政治の主役として押し出す動きの背後には、「国民」の側に変革主体としての弱さがあったことも併せて指摘されている。

第2部は、国民革命の政治過程を時系列にたどる3つの章から構成されている。第3章では、国民会議とその運動が取り上げられ、国民各層の運動と国共両党の戦術の合流として分析されている。ところが、この運動が最も盛り上がった1924、25年でさえ、国民各層のイニシアチブが不足し、国民会議という民意代表機関による自治よりも党治を重視する傾向が強まっていく。その過程で運動の分化や限界も顕在化し、やがて北伐戦争へと革命の形態は転換する。

第4章は、その北伐戦争が武漢を制圧し、そこを

中心に新政権の樹立を目指した時期が扱われる。この時期の革命情勢はイギリスの孤立化と軍閥間の非連携に由来し、国民的連合戦線の広さに依存していた。しかし、労農大衆の変革行動への参入とともに、運動はしだいに急進化の徴候を示し始めていた。連合戦線の保持のためには、強力な指導力による内部矛盾の克服が焦眉の課題となっていたが、国共両党、両党の中央と地方、コミンテルンなどが各種各様の情勢分析にもとづいて行動し、有効な統一的施策が採られない中で、やがて「中国版ボナパルティスト蒋介石」を覇権の道へと押し上げていく。

第5章では、上述した急進化の徴候が劇的な形で姿を現した上海3次暴動と湖南農民運動が検討される。前者では、第3次暴動こそが中共の指導が貫徹した「上海市民革命」であったが、その勝利は革命勢力の決定的分裂の起点となったととらえられる。「上海市民革命」は、右派軍の武装解除、蒋介石の拘束をも視野に入れた左派の南京・上海先取戦略との連携に欠け、革命を支える軍事的政治的条件が失われたこと、中共の指導部内には連合戦線重視の立場とは異なった急進的なセクショナリズムが顕在化し、資本家団体を離反に駆り立てたことが分析されている。後者では、湖南農民運動を基準として国民革命の全体像を論断するような方法を批判し、むしろ省自治から国民革命への湖南政局の展開こそが農民運動を歴史舞台の前面に押し出したとする。そうした農民運動が急速に発展し、さらに急進化した背景として、会党（「打富済貧」等を掲げた伝統的秘密結社）的紐帯の取り込みがあったことに着目し、急進化に伴う農村でのアナキー状況の出現が、省政権さらにはその上級権力であった武漢国民政府との切迫した矛盾を生み出した状況が示されている。

第3部は、革命から統治への課題転換が要請され、国民革命が収束に向かう模索過程を扱った2つの章から構成されている。第6章では、四・一二政変以降において守勢に回った武漢国民政府が、財政・金融の統制強化と対外関係の緊張緩和を柱とする現実主義的な自存政策を採用し、それが破綻していく過程が検討されている。そこでは、革命の深化と政府の基盤強化が鋭く対立し、国民革命の高揚を支えた

諸階層間の利害調整に十分機敏に対応できなかった武漢国民政府の未熟さが分析されている。その隙について蒋介石の南京国民政府は覇権の展望を獲得していく。

第7章では、国共党内合作の歴史を改めて振り返り、両党の対抗面だけではなく連携の契機的重要性を確認しつつ、四・一二政変に際しても国民党と国民各層には政変への合意が形成されていなかった事実が指摘される。四・一二政変の核心は、大衆運動の猛威にさらされた紳商層の権威回復と漸進的改革への期待、国民党内における中共党員の独自性制限を目指す蒋介石の「限共」論、広西軍閥の勢力拡張願望という3つの契機が結合したものであり、その結節点になったのが「清党」（国民党運動の内部からの浄化）という大義名分であった。そして、一連の過程を経て、国民党は革命党から中華民国の執権党へと脱皮していく。また、そのレールを敷いた人物として、かつて北京政府で活躍し、四・一二政変を実務面から支えた黄郛に光をあてている。

終章は、以上の各章の分析を踏まえて、改めて本書全体の論旨がまとめられている。とりわけ、国民革命が都市中産階層の「国民」としての未熟さを伏線として、革命党独裁の党治体制へと帰着したことが強調され、それは同時に「戦間期の苛烈な国際政治の中で国家・国民の自立と富強を求めた中国の選択の姿」であったことを確認している。そして、その実質はライバルである中共にも引き継がれ、1949年以降の毛沢東体制は、「党治体制の完成した姿」であり、それが現代中国の国家・国民を引き回した文革の混迷にもつながったという展望が示されている。

III

さて、若干のコメントを付して、書評の責を果たしておきたい。

本書において印象深い第1の点は、すでに言及したように、近現代中国の党治体制の形成を国民革命の曲折と混沌に満ちた政治過程のダイナミズムに求めていることである。党治体制は、国民政府時期から人民共和国時期を貫き今日まで存続しており、20

世紀中国を特徴づける政治体制として多くの研究者の関心を集めてきた。そこでは、党治体制の淵源をロシア革命に求めるだけでなく、孫文など指導的政治家の政治理念、あるいは伝統中国から引き継いだ政治文化の影響などと絡めて論じられることが多いが、本書の立場は、これらとは質を異にしている。長年にわたる着実な実証作業の蓄積を踏まえているだけに、国民革命の底知れぬ混沌が「超越的調整権力」としての党治体制を招き寄せたという著者の指摘は、説得力と魅力に富んでいる。ただし、そうであるが故に、中国の一方独裁・党治体制をめぐる多様な言説に対する著者独自の批判、あるいはそれらとの相互の対話を、本書において整理された形で展開してほしかったと思う。

その点に関連していえば、著者は国民革命が産み落とした党治体制をその後の現代中国につなげて理解しようとしているが、そのためには、顧慮すべき多くの媒介項が必要であろう。周知のように、南京国民政府の党治体制は、孫文の有名な「訓政」論にもとづいており、「憲政」への移行を展望した、いわば時限的性格を帯びていた。それが当初の意図に反して長く固着化する理由は、その後の激動する中国の内外環境と切り離して論じることはできない。他方、中共の場合についても、文革で頂点に達する毛沢東の個人崇拜は、日中戦争期の共産党統治区における最も切迫した危機的状況の中に胚胎したとする有力な見解がある。すなわち、国民革命が産み落とした党治体制は、あくまで「初歩的形成」であって、その固着化や強化はその後の政治的激動をくぐり抜ける過程で進行し、いくつかの節目を経て大きく変質して現代中国につながるのではなかろうか。その意味において、著者のいう党治体制の「初歩的形成」という表現の含意が、より明確に提示される必要があろう。それは、とりもなおさず国民革命の歴史的位置づけをより鮮明にする作業につながることにあろう。

第2に印象深い点は、国民革命が党治体制という独裁権力に帰着せざるを得なかったのは、当時の中国における「国民」形成の未熟という要因に規定されていたという認識が本書の随所で示唆されている

ことである。これを裏返せば、「国民」としての成熟があれば、革命はより民主的な政治体制に行き着いた、あるいはその可能性がより広がっていたはずだという想定が潜んでいるように思われる。このような論理は、やや理念的すぎるが、抽象的なレベルにおける立論としては理解できないわけではない。しかし、実態分析においては、当時の「国民」としての成熟度はどのような水準にあって、どのような特質を具えていたのか、そしてそれはどのような指標で計りうるのか、といった疑問が念頭を去らなかった。もちろん、このような問いかけへの解答を、政治過程の個別分析を主眼とする本書にのみ求めるのは相応しくなかろう。しかし、本書を通じて、革命史の再構成にとって、その基底を構成する中国社会の構造的把握をより深めていくことが重要な課題であるということを改めて印象づけられた。

第3に、本書の叙述スタイルについて触れておきたい。著者は「あとがき」において、「国民革命史、それも政治過程の研究の魅力が冷めなかったのは、そこに人間の営みを見る楽しみに浸れたことによる」と述べている。著者のいう「楽しみ」は、本書の叙述を通して十分に伝わってくる。一般に、政治過程は多彩な個性や欠点を持った人間による政治判断の連鎖であり、ひとつの判断が当事者の予想もしない事態をもたらすことも珍しくはない。そうした機微を見つめる著者の柔らかな視線は、叙述の端々に挟み込まれた著者の「感慨」を通して明瞭に感じ取れるのである。とはいえ、そこには説明がやや抽象的で難解になっている部分や、たとえば若き毛沢東に対する「共感」(298ページ)など、評者には違和感を覚える部分もないわけではない。しかし、歴史研究が、単なる無味乾燥な事実の緻密な実証とその再構成にとどまらない、叙述と一体化した作品にほかならないことを改めて想起させられた。

以上、とくに印象に残った点にのみ限定して評者のコメントを並べてきた。冒頭に触れたように、評者は研究者として駆け出しの頃から著者の仕事から多くのことを学んできた。その学恩に感謝しつつ、筆を置くことにしたい。

(埼玉大学教養学部教授)